

[COMMUNION]

WEB:<http://www.nskk.org/tokyo/index.html>
E-mail:comm.tko@nskkn.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678
Diocese Office



第37号
(通巻1272号)
2017年6月4日
編集：広報委員会
委員長：渡辺康弘
日本聖公会東京教区
港区芝公園 3-6-18



環状グループ 筍掘り



山手グループ グリーンデイピクニック



4月29日 春の野外活動 フォトアルバム



下町グループ ファミリーピクニック



多摩グループ バーベキュー

ちは信仰について話すよう勧められたからだ。
A2…祖父が司祭であったことはよく知っていた。そしてそのことをとても誇りに感じていた。

A4…教会から離れたことはないが、毎週通って教会に深く関与することが困難になった時期はあった。その頃は教会は最優先事項ではなくなった。気付かないうちに神と疎遠になっていったが、神は私が戻ることを望んでいる、と実感し、それが再び教会との関わりに戻るきっかけとなった。そして定期的に教会の門を通るようにしてくれたのは、聖歌隊で歌おう、という神が与えてくれたインスピレーションだった。また、教会の平日の祈り、特に朝の祈りに定期的に参加することによって、教会とのつながりは再び深いものとなった。朝の祈りに参加し始めたのは、初めは毎朝司式をしてくれる牧師の厚意に謝意を表すためだったが、次第に1日の始め方として本当に良い方法だということがわかり、数ヶ月後には主に完全に心をつかまれてしまった。



A1…その昔、クリスチャンでない私の母方祖母の葬儀に連れられた時。
A2…そもそも、明治期に洗礼を受けた父の祖母が、孫達皆に幼児洗礼を授けさせたのが始まりなのですが、孫である父は五男であり、私自身が物心ついた時には祖父(父の親)しかおらず、その祖父も程なく亡くなってしまったので殆ど記憶がありません。
A3…悩みと言うか、日曜日は寝坊したいのに何で叩き起こされて、朝から教会に行かなくてはならないのかとか、他の家庭では遊園地行ったりするのになぜ毎日曜日ごとに教会なの？と言う疑問がいつもありました。祈禱書は意味不明だし、立ったり座ったり跪(ひざまず)いたり忙しいし、説教は退屈だしと、まあひどい子供でした。それと、自分で信仰に目覚めたり、何か故あって教会の門を叩いたのでありませんので、そう言った方々と中々共感が出来ない悩みは現在も有ります。また、他者からの先入観で「クリスチャンなので品行方正なでしょ。」と

言った見方をされる事も有りました。当然もつと自由でありたいと言う反発も有りました。
A4…中学生くらいまではサーバーなどの奉仕があったので行っていましたが、高校生位から日曜日の寝坊が一番の安らぎになって、教会には行ったり行かなかったりし、学生時代は家にも寄り付かなくなって、殆ど行った記憶がありません。
その後結婚を機に通うようになり、新しく就任した若い牧師の頃にはサーバー、そして信徒奉仕者を任せられたりして、毎日曜日行くようになりました。時が経ち、他の信徒から信徒奉仕者が一目置かれるような存在(勝手にそう感じていたのかもしれない)ですが、当時はまだその制度が始まったばかりなので)となっていく様に感じ、段々と負担に感じる様になっていきました。同時に教会委員の仕事も負担となっていました。
そのころ個人的問題が生じ、一旦教会との交わりを切ろうと決心しました。それが、戻るきっかけとなったのは、教会建築と言う仕事に係るよう要請してくれた、当時の司祭や一部教会委員のお蔭と言えるでしょう。

の後おっさんはここにこ笑いながらスーッと何も言わずに天に帰って行ってしまいました。その時彼は、何やら自分と天と繋ぐ紐のような物を置いていきました。まあこれらは単に夢想なのでしょうが、不思議な事にこの繋がりは今でもずっと感じています。見られている、守られている実感、これも幼児洗礼のお蔭でしょうか？いやわかりません。
自分で門叩いていないボーンクリスチャンのせいかな、教会の祈りの中で自分の内側への祈りより、代祈がより素晴らしいと感じています。他者の為(十分ではありませんが)は一つの信仰の神髄と思っています。全てではないですが、廻りを見るとボーンクリスチャンにはこの傾向がある気がします。



アンケートを読んで感じることは、みんな自然とキリスト教を受け入れ、感謝しているということ。しかしキリスト教の家庭に生まれたというのは、1つのきっかけにすぎない。信仰の継承は、親の責任というより、教会の課題であり、大切なのは、その人本人をどう教会が受け入れたかではないだろうか。

シリーズ 2023年②

力を合わせて

松村豊

このたび、定年を迎えられた総主事 鈴木裕二司祭の後任を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

6年後の2023年、教区成立100年を迎えます。これまでに多くの信仰の先輩方が、その時々における課題を乗り越え教区の平安と進歩に尽力されたように、今度は、私たちが将来の信徒を思い、決断し行動する番です。

ご存じのように、今、教区は大きな課題に直面しています。聖職の圧倒的な不足、信徒の漸減や高齢化とこれに伴う財政難、老朽の教会建物や無住の牧師館の維持などです。また、社会では超高齢化のみならず、一昔前と今では特に若年層や女性の働き方に大きな変化が見られます。ゆとりがない社会に皆、不安や忙しさを感じています。これ



ら相俟って、教会生活の諸活動を昔と同じように行うのが難しくなってきたことを実感します。

それぞれの教会は信仰で紡いだ尊い歴史と豊かな特性を持っていますが、一方、10年30年先を具体的に思い描くことが出来ずにいます。この先2年間で6名の司祭が定年退職を迎え、現実是一段と厳しくなります。

まるで危急存亡の秋のように感じます。私たちは、以前であれば出来得たであろう事を当然視するのではなく、一人ひとり、そして教会が情勢の変化をどう考え対応したらいいのか。また、教会共同体である教区は、総体として何を優先していくのか。確認して進まなければならないと思います。

ところで、必ず来ると云われる首都直下地震も不安

です。被災した自分とどう向き合い、再び立ち上がるか。冷静で居られる今のうちに考えてみようかと昨年から各教会での話し合いを始めています。「自分」や「信仰の家である教会」とは何か、また、普段あまり意識しない「地域と教会」はどうあるのか。原点を考えさせられます。

数々の課題への対処は一朝一夕には出来ません。しかし、ピンチはチャンスとも云われます。苦しい時、常に神さまが居てくださる。話し合える力、決めることの出来る力によって多様な意見や思いが交わされ、祈りのうちにあって教会教区が整えられていくことを信じます。教区事務所は、決定されたことを遂行し円滑に運営できるように諸教会との意思疎通に一層努める所存です。全ての聖職と信徒に、将来の信徒に思いを致す愛と知恵と勇気が与えられますよう祈ります。

(東京教区教区事務所 総主事)

「司祭の心」

「出会う」といつと

竹内敏晴著 藤原書店 2009年刊 執事 太田 信三



竹内敏晴著 藤原書店 2009年刊 執事 太田 信三

「出会う」ということは、いくつかの層があるようです。聖書を例にするならば：イエス様は日々出かけていって多くの人と出会いますが、ある人は単なるユダヤ人の男のひとりとしてイエスと出会います。しかしある人は、来るべきメシアとして「主」イエスと出会います。同じ「出会い」でも、そこには違いがある。その違いはどうして起こるのでしょうか。
四福音書はいずれもイエス様の昇天から数十年後に書かれました。福音記者たちは、直接イエス様と会ったことがないばかりか、ルカ、ヨハネと後代になればなるほど、イエス様に関する直接的な情報は減ったこと

とでしょう。しかし不思議なことに、どの福音書にもイエス様との出会いの物語が実に生き生きと記されています。それは、主イエス昇天後数十年の時を経てなお、多くの人々が主イエスと「出会う」という経験をしたからではないでしょうか。その出会いの喜びを伝えたくて、福音書は記されたに違いありません。それゆえ福音書は、2000年後を生きるわたしたちにも、「あなたたちも主イエスと出会うことができますよ!」ということを語り続けます。
主イエスとわたしたちは今なお出会うことができる。この不思議なことがどうして起こり得るのか、または、どうして起こらないのか。さらに、主イエスのように、他者と真に出会うには…。
本書を読み、著者竹内敏晴さんとまるで出会ってお話ししているかのような気持ちになりながら、このようなことを考えさせられました。

総勢33名！ ナイトクルー
ルーピング開催

新田 紗世

ナイトクルーリングは、青少年世代の連携を目的としてはじまりました。今回は、SSネットワークにもご協力頂き、参加者は春から中学生となる小学6年生から35歳まで、総勢33名となりました。普段は、それぞれで活動している3つの会ですが、ナイトクルーリングでは、各世代が顔を合わせ、お互いを知り「ここを卒業したら、あそこへ行けるんだ！」と想ってもらえる機会になればと考えています。



プロگرامは、まずはレクリエーション、その後みんなで夕食のカレーを作って食べ、銭湯へ行き、夜10時には完全消灯。朝の3時に起きて、朝日をめざし、晴海ふ頭へ向かいます。まだまだ暗い中、朝日を目指して一生懸命歩き、到着し

たら、朝の祈りをお捧げし、日の出を見てから、月島聖公会に戻り、解散となります。式文もよく見えないうちから、だんだんと明るくなつて、ついに日の出！の瞬間はみんなわくわくです。たった半日ちよつ

とのプログラムですが、みんなの出会い、楽しむ力に助けられ、とても充実した時間になりました。

(浅草聖ヨハネ教会信徒)



世界の聖公会ニュース

世界の聖公会
ニュース⑤
イラクからの
難民、カナダ
聖公会司祭に

アユープ・

アドワー牧師は、2008年にイラクのモスルにおいてカルデア典礼カトリック教会の司祭に叙任。2014年に難民としてカ

ナダに移住。ブリッティッシュ・コロンビアのサレーク教徒と聖公会信徒との交流が進展した。アドワー師は聖公会の聖職への召命を受け、識別の過程を経て2016年に聖公会にて堅信を受けた。

(2017年4月25日)

初の黒人女性主教、アメリカ聖公会
ジェニファー・バ

スカーヴィル・バロウズ牧師はインディアナポリス教区の第11代主教として按手を受け、初の黒人女性主教が誕生した。

20年にわたりインディアナポリス教区を率いた第10代キャサリン・ウエイニツク主教は初の女性主教であり、バスカーヴィル・バロウズ師は女性主教の後任となった初めての女性主教ともなった。

(2017年5月2日)

死刑囚のためのヴィジル、主教座にて

アーカンソー州トリニティ主教座聖堂では、予定されている死刑執行に先立ち、ヴィジルを行う。「私たちの祈りは、死刑囚とその最愛の人々、死刑の判決を言い渡された行いの犠牲者とその最愛の人々、死刑を執行する職務を行う人々、そして私たち自身のために、希望と、強さと、憐れみのために捧げられます。」ヴィジルは沈黙の内にて執行の瞬間まで主教座にて行われ、執行された場合、死刑廃絶を目指すグループのメンバーとともに知事公邸の前でも行われる。

(2017年4月19日)

次回夏号7月23日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア (三十一)

1. 分裂をもたらす

牧師「イエスは『分裂をもたらすために来た』と言われました。『父は息子と、母は娘と、嫁は姑と対立して分かれる (ルカ 12:49-53)』と、これはイエスの言葉の中でも特に解釈の難しい言葉です」

ある信徒「先生、私にはその言葉の意味がすごくよく分かります」

牧師「あなたは、この難解なイエスの言葉の意味がよく分かるというのですか」

ある信徒「ええ、身に染みてよく分かります。だってうちの家族はまったくその通りになっていますから」

2. 必ず間に合う

ある人「すみません、急いで〇〇教会まで行ってください。2時からの結婚式に出たいんです」

タクシーの運転手「えっ2時、それは無理ですよ。とても間に合いません、もう結婚式がはじまる時間ですよ」

ある人「それは大丈夫です、結婚式ははじまりません」

タクシーの運転手「どうしてですか」

ある人「その結婚式の司式をするのは私ですから」

3. ピサの斜塔?

信徒A「日本の教会はピサの斜塔みたいだね」

信徒B「どういうこと」

信徒A「傾いて倒れそうだけど、倒れないってこと」